

歴史の「物語論」を考え直す

—『物語の哲学』における「歴史の反実在論」を中心に—

山 野 弘 樹

本稿は、「歴史の物語論」をめぐる論争史において画期的な位置づけを有する野家啓一氏の著作『物語の哲学』を再検討することを通して、「歴史」と「物語」の関係性を捉え直すと共に、今日における〈歴史をめぐる問題〉を思考する際の解釈学的視座を模索することを目的とする。

(一)

野家啓一氏（以下、敬称略）による『物語の哲学』¹とは、90年代から2000年代にかけての「歴史の物語論」をめぐる議論の火付け役となった書物である。それでは、数多の論争を巻き起こした『物語の哲学』とは、一体いかなる特徴を持った哲学書なのであろうか。

本書の中核となる構想を、野家は次のように表現している。

われわれは今、大文字の「歴史」が終焉した後の、「起源とテロスの不在」という荒涼とした場所に立っている。しかし、その地点こそは、一切のイデオロギー的虚飾を脱ぎ捨てることによって、われわれが真の意味での「歴史哲学」を構想することのできる唯一の可能な場所なのである。(14頁)

野家がここで述べている「起源とテロスの不在」とは、例えばアウグスティヌスの『神の国』やヘーゲルの『歴史哲学講義』によって代表されるような「弁神論」的ないし「歴史神学」的な「歴史」の枠組みがすでにその妥当性を失ってしまっている状況を指すものである。野家本人の言葉を借りるなら、『『アルケー』と『テロス』によって枠取られた完結した歴史という表象、あるいは目的論と弁神論によって彩られたアウグスティヌス以来の歴史意識のあり方こそが終焉した』(151頁) 学問的な状況がここで想定されているのである。

こうした時代状況において、19世紀以来の「実証史学」こそが「歴史」の研究を主導してきたことは、史学史が雄弁に物語るところである。しかし、ここで

野家は、堅実な実証研究に則った歴史研究を通して「過去」の「事実」が次第に明らかになってくるといふ、実証史学が暗黙裡に掲げる実証主義的前提に依って立つことをしない。むしろここで野家が述べるテーゼとはその前提に疑義を突き付けるものであり、ここに『物語の哲学』最大の特徴が表れているのである。

では、野家が主張する立場、すなわち「歴史の物語論」とはどのようなものか。それは、「言語行為 (speech act)」としての「物語り (narrative)」²の観点から、「物語」や「歴史叙述」の問題を考えていく立場である。しかし、これだけでは、一体「常識」的な物語制作や歴史研究の理解と何が違うのかを見通すことは難しいであろう。なぜなら、誰かが、誰かに対して、何かを物語るといふのは、考えるまでもなく自明な事柄であるからである。

それでは、一体「歴史の物語論」が有するテーゼの独自性はいかなる点に存するのであろうか。それは、野家による次の一節に明瞭に表現されている。

ここでは、「出来事、コンテキスト、時間系列」という要件を備えた言語行為を、とりあえず「物語行為」と呼んでおこう。もちろん、昔語りやお伽噺に代表される「物語」の伝承が、この物語行為の典型例を形作っていることは言うまでもない。しかし、後にみるように、物語行為の射程は単なる「虚構」のみならず、「事実」の領域にも及ぶのであり、それは歴史叙述をも包摂することによって、われわれに不可欠かつ根源的な歴史意識の構成に積極的に参加するのである。(17頁。強調は筆者)

さらに、「物語行為」が「虚構」のみならず「事実」の領域にも及ぶという点に関して、野家は次のようにも主張する。

私がここで主張したいのは、前者〔『源氏物語』等に代表されるような歴史物語〕と同様に後者の出来事〔すなわち、「源義経が静御前を妻に迎えた」という出来事〕に代表されるような、歴史的事実もまた、歴史を物語るといふ言語行為、すなわち「物語行為」を離れては意味をなさず、また存在しえないという、すまじ返った常識の温顔を少しばかり逆撫でしかねないテーゼである。(98頁。強調は筆者)

ここで野家は明らかに、いかに「物語」を「語る」のかという「物語行為」の次元から、「過去」に存在した出来事に関する「歴史叙述」の次元、そしてその

「過去」に生じた「事実」に関する存在論的次元にまで考察の射程が拡張可能であることを述べている。こうした事態を、野家は端的に「過去に生じた『出来事』は、このような物語行為の中にしか存在しない」（17頁）と述べている。しかし、物語論から存在論までを架橋せんとするこうした議論は、一体いかにして論証されていくのであろうか。この点について、立ち止まって検討を行っていく必要がある。

野家はまず、「知覚」と「解釈学的変形」という事態を「物語行為」の観点から考察することを通して、「出来事」（およびその「経験」と「物語行為」（およびそこから語り出された「物語」）の間には克服し難い密接な関係性がある事を示す。この点について、実際に野家の言を引こう。

現前しつつある知覚的体験は、物語行為を通じた「解釈学的変形」を被ることによって、想起のコンテキストの中に過去の「出来事」として再現される。いや、「再現」という言葉は誤解を招きやすい。過去の想起は知覚的現在の忠実な「写し」ではないからである。もし忠実に模写されるべき知覚的現在がどこかに存在しているとすれば、それは記憶の中にあるほかはないであろう。しかし、記憶の中にあるのは解釈学的変形を受けた過去の経験だけである。それが知覚的現在でないことはもちろん、知覚的現在と比較して模写の善し悪しを云々できるようなものでもないことは明らかであろう。（17-18頁）

ここでのポイントは二つある。それぞれ、「知覚的体験」に対する「解釈学的変形」と、そうして「記憶」された事柄と「知覚的現在」との間の比較不可能性である。

野家はまず、「現前しつつある知覚的体験」が「物語行為を通じた『解釈学的変形』」を被るという事態を指摘する。そのように「解釈学的変形」を被った「知覚的体験」は、出来事を意味づける「物語行為」と紐づいた形で「経験」³となる。このようにして、事後的な「構成」⁴から無辜のままであり続ける「過去の体験」⁵は存在しないということが示される。

そして、こうして「解釈学的変形」を受けた「過去の経験」および「過去の『出来事』」は、「知覚的現在」と比較され得ないことが述べられる。なぜなら、「当の知覚的現在はすでに存在しない以上、模写や比較という操作はそもそも意味をなさない」（18頁）からである。ここから、「過去の経験」について次のように語られる。「われわれは過ぎ去った知覚的体験そのものについて語っているの

ではなく、想起された解釈学的経験について過去形という言語形式を通じて語っているのである」(同上)。

こうした一連の論証に立脚点を置くことによって、野家は「ごく常識的に考えれば、過去の出来事はわれわれが想起しようとしまいと、またそれについて語ろうと語るまいと、そうした主観的な活動からは独立に厳然として客観的に存在する」という「健全な常識」(115頁)を批判していく。しかし、「知覚」の形態を言語的な分節が縁どることが事実であり、そうして記憶された「出来事」が過去の「知覚的体験」と厳密な意味で「照合」することが不可能だとしても、そこから一切の「過去」の「構築」というテーゼを導き出すことは未だ難しいであろう。もちろん、野家もこの段階でそのテーゼを前景化させているわけではない。それでは、野家はここから、一体いかにして「物語」による「過去」の「制作」という議論に移っていくのか。その点について詳細に検討をしていく。

(二)

『物語の哲学』を理解する為には、まず野家がいかなる議論をもって自らの論証を導いているのかという点を明瞭にすることが必要である。その為にも、まずは野家の論証を支える前提について確認をする。野家の論証を支える強力な前提、それは「言語」(および言語の「意味」)に関するソシュールおよびデリダ的な視座である。野家は柳田國男の『口承文芸史考』を「近代批判というすぐれて現代的な問題意識に貫かれていた」(23頁)思索として評価しつつ、近代批判の装置として刷新された「物語の伝承」(76頁)を考察する為には、「声と文字」の観点から、フッサール『幾何学の起源』の解釈に足を踏み入れるのであるが、その際に野家が基本的な前提として想定しているのはソシュール的な言語観である⁶。野家は音声や文字といった言語が人間の経験にいかなる影響を及ぼしているのかという問いに対し、次のように述べている。

音声と文字は、言うまでもなく「意味するもの (signifiant)」に属する。しかし、それらはアプリアリに自存する「意味されるもの (signifié)」に後から付け加えられた外皮、すなわち名称目録ではない。ソシュールが指摘するように、両者は一枚の紙の裏表のようなものであり、切り離すことはできない。(中略) 超越的意味の自己同一性が伝達過程における無限の反復可能性を保証しているわけではない。そのように考えることは、「意味するもの」に対する「意味されるもの」の事實的・論理的先行性を主張することであり、音

声や文字を単なる意味の外皮と見なす謬見にはかならない。(31-32 頁)

ここで述べられているシニフィアン—シニフィエの相関関係という図式は、ソシュールが提出した構造主義的な言語理解の中でも最も顕著なものの一つであると言えよう。こうした言語学的前提が通奏低音を奏でる中で、野家は「理念的対象の同一性は、究極的真理の認識を目標とする学問共同体が掲げる一つの『要請』」(40 頁) であるとし、フッサールが求めたところの「この輝かしい目標は、ある意味で、近代自然科学とその究極的基礎づけを目指してきた近代哲学とが共有してきた根深いオブセッションであった」(41 頁) と断じる。なぜならば、いかなるシニフィアンからも独立した超越的なシニフィエを探究するという営み自体が、「自己同一的な超越的意味の独立自存という物象化的錯視」(32 頁) に陥っているとされるからである。いかなるシニフィエも、シニフィアンによる分節化を免れない。そしてシニフィアンとして機能する音声や文字は時代や文化に応じて可変的であり、その意味で恣意的である。こうした観点から野家は、「意味の理念性」を志向したフッサールとは逆に、「同一性の危機」を論じる形で、むしろデリダの立場への歩み寄りを見せるのである。

野家は、基本的な参照軸としてデリダの戦略⁷を選び取りつつ、オースティン『言語と行為』における「話者の意図」という前提を批判し、オースティンが言語行為の例としてはむしろ逸脱例として見なした「物語る」という行為を積極的に捉え返していくことを試みる。デリダは「文字」と「話者の意図」をむしろ切り離すものとして「署名」という概念を論じているが、まさに「署名」概念に込められた「反復可能な、繰り返し可能な、模倣可能な形式」⁸ という観点から、「現前のかつ単独的な意図」⁹ からの解放が論じられることになる。こうしたデリダの着想を野家は次のように論じる。

このようにしてデリダは、言語行為論を「脱構築」することによって「話者の意図の現前」を中心的な位置から追放し、遂行的発言における「話者の特権性」を剥奪する。一言でいえば、彼は「話者の死」を宣言するのである。(55 頁)

さらに、エクリチュールと「話者」の意図が切り離されるのみならず、まとまったテキストとしての「作品」を生み出す「作者」に関しても、有名なロラン・バルトによる「作者の死」の議論を通して、野家はその特権性を剥奪する道を選ぶ

のである¹¹。

こうした議論を経た野家は、デリダ、バルトによる「近代」批判の文脈に則った形で——その過程において、フッサール現象学やディルタイ解釈学に言及しているにも関わらず——次のように宣言するのである。

そもそも、解釈学的とも呼べるこのような伝承のプロセスにおいては、「テキストの同一性」はおおよそ保証の限りではない。それゆえ、すでに「話者の死」と「作者の死」を通過したわれわれは、ここでさらに「テキストの死」に立ち会うことになるであろう。(71頁)

ここで言われている「テキストの同一性」とは、「テキストの意味」のみならず、「テキストの形式」に関してもその射程が及んでいる表現である。実際、野家自身によって次のように語られている。すなわち、「物語」を形成する「物語行為」とは、言わば「解釈学的変形」としての「編集作業」に他ならず、「話者」も「作者」も不在である中、「引用」や「寓話化」を通して織り込まれた「テキストの同一性」が保証されることはないといわれるのである¹¹。言い換えれば、デリダの批判（「話者の死」）およびバルトの批判（「作者の死」）を参照しつつ、「リゾーム状の物語生成の過程」(75頁)を語り出すことによって、野家は「同一性の危機」をむしろポジティブに捉え返すのだ。

それでは、野家にとって「テキストの意味」が収斂して来る「場」とはどこか。それこそが、テキストを受容する「聴き手」あるいは「読み手」に他ならない。野家は近代的な意味における「話者」の代わりに「匿名の話者」という概念を用いつつ、次のように述べる。

意味理解の主導権が聴き手あるいは読者に委譲されることによって、物語は話者の制御の範囲を越えて、「過剰に」あるいは「過小に」意味することを余儀なくされる。つまり、物語の享受は聴き手や読者の想像力を梃子にした「ずれ」や「ゆらぎ」を無限に増殖させつつ進行するのである。それゆえ、物語の理解には「正解」も「誤解」もありえない。(67頁)

こうした「歴史的伝統との対話」ないしは「過去と現在との相互媒介」(69頁)に対して、野家は、「記憶の濾過作用」としての「取捨選択の『力学』」について言及しながら、次のようにも述べていた。

その選択は、柳田が指摘するように、物語が伝達される「場」や「コンテクスト」の圧力によっても積極的に促進される。聴衆が耳を傾けてくれなければ話が續かない以上、話者は絶えず「聴衆の顔色によって影響を受ける」からである。記憶と忘却との拮抗によって洗い出された細部は話者の想像力によって補完され、さらには聴衆の興味関心の方向に沿って膨らんでいく。それゆえ、物語は「話者」の作用と「場」の反作用とのせめぎあいとその止揚を通じて形成されて行くのである。(73 頁)

このようにして、前者の引用は、「反獨創性」や「匿名性」等の特徴とする「物語」の「消極的特質」を表すものであり、それに対して後者の引用は、「『解釈学的創造』ともいふべき積極的特質が提示されている」(同上)とされる。こうした消極的／積極的な「解釈学的変形」を経て、人間の諸経験を形成し、そのことを通じて「過去の体験」を構築する「物語」がリゾーム状に生成していくと指摘されるのである。

(三)

さて、こうした「物語」の反獨創的・無名的・匿名的 (67 頁)、そして解釈学的な「変形」の分析に当てはまるのは、それぞれ柳田國男の民俗学に代表されるような「常民」の「物語」の類に過ぎないと思われるかもしれない。しかし、ここで野家は、こうした匿名的かつ解釈学的な伝承としての「物語」の生成過程が、「物語行為」を通じて創出される様々な「物語」にまで妥当すると主張する。なぜなら、「物語が時間的順序に従って出来事の連鎖を語る文芸形式である以上、それが物語文と多くの特質を共有していることは、ある意味で当然」(89-90 頁)だからである。ここで言われている「物語文」とは、分析哲学の立場から歴史叙述の考察を試みたダントーが提出した概念である。その定義は「二つの別個の時間的に離れた出来事 E1 および E2 を指示し、そして指示されたもののうち、より初期の出来事を記述する」¹² というものであるが、分かりやすく述べるならば、時間上に並べられた出来事を有意味な文脈に整序し、その文脈に応じた観点から、その文脈の始点となる出来事を述べるような文のことである¹³。こうした点を踏まえて、野家は「物語文による過去の歴史の変容として語ったことは、前節でわれわれが物語の『解釈学的変形』として特徴づけたことと対応する」(90 頁)と述べ、その内実を次のように主張するのである。

過去を現在の視点から再構成し、構成された過去によって逆に現在が意味づけられ、現在の自己理解が変容されるという往復運動を起動させることにおいて、物語行為は二重の意味で過去構成的なのである。(108頁)

このようにして、「過去」を題材とした伝承としての「物語」と、「過去」を研究対象とする歴史叙述としての「物語」の境界線が取り払われることによってこそ、野家は次のように言明することができた。

「物語る」という言語行為を通じた思い出の構造化と共同化こそが、ほかならぬ歴史的事実の成立条件なのである。それゆえ、歴史的事実は、ありのままの「客観的事実」であるよりは、むしろ物語行為によって幾重にも媒介され、変容された「解釈学的事実」と呼ばれねばならない。(122頁)

このとき、野家が退けている「客観的事実」という語の「客観的」とは、いわゆる「真理の対応説」における「対応」や「一致」を意味するものである。野家曰く、『客観的』という言葉が、歴史叙述と歴史的事実との『対応』や『一致』を意味するものであるならば、拳証責任は論者の側にあると言わねばならない(137頁)のである。そうして、「歴史叙述の真偽は『対応 (correspondence)』に基づく真理条件ではなく、『保証された主張可能性 (warranted assertibility)』によって判断されねばならない」(同上)。

こうした立場は、「過去の事実に対して『实在論』ではなく『反实在論』の立場を取ることを意味する」(同上)のものであり、それこそが野家による「歴史哲学テーゼ」の第一命題を構成することになる。

(1) 過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく、「想起」を通じて解釈学的に再構成されたものである。[歴史の反实在論] (157-158頁)

野家はこの命題を説明する際に、「過去の出来事を『知覚』することが不可能である以上、われわれには『想起』という手段しか残されていない」(159頁)と述べ、「記憶の誤りは別の記憶によって訂正されるほかはなく、それ以外に記憶像を『過去自体』と照合するいかなる手段もわれわれは持ち合わせていない」(160頁)と断じている。だからこそ、過去の出来事は言語的に記憶し、かつ想起され

る必要があるのであり、かくして「歴史は物語られねばならない」(8頁)のである。

しかし、ここで注意しなくてはならない点は、野家による「歴史の反実在論」が決して〈過去の出来事〉の存在を否定するものではないという点である。そのことは特に、1995年刊行の『物語の哲学』の姉妹編とも言える2007年の著作『歴史を哲学する——七日間の集中講義』に顕著に表れている。というのも、ここで野家は「過去はまぎれもなく実在しています」(111頁)、「誤解されるといけません、むしろ『過去自体』の存在を否定することと、『過去の実在』を否定することとはまったく別の事柄です。前者を否定しながら後者を肯定することは十分に可能ですし、それこそがこの講義の目指しているところです。そのためには多少なりとも『実在』の意味を分節化しておく必要があります」(146頁)と明確に主張しているからである。

だが、「歴史的事実の存在論的先行性と歴史記述の認識論的先行性との間の錯綜した関係」(『歴史を哲学する』47頁)を論じてきたはずの本書の帰結は、やはり「認識論的先行性」(あるいは、「物語り」論的先行性)に比重が傾いているように思われる。それというのも、野家は「過去が実在する」と言われるときの「過去」の意味を「一連の手続き」をパスした「社会的に公認された過去」(166頁)に限定して議論を理解しているからである。大森荘蔵に範を取り、野家が提示する「手続き」とは(a)証言の一致、(b)想起命題の自然法則、心理法則、経済法則等の法則との合致、(c)物証の三点であるが、このうち二点目の「法則との合致」はともかくとしても、一点目と三点目はなお考察の余地があると言わざるを得ない。なぜなら、「どちらがより妥当な証言か」ということを決める基準と、「何がより妥当な物証なのか」ということを決める基準に対する考察の光が十分に当てられていないからである。同様の観点から、「歴史書と小説の間の境界線」を判定する基準として野家が主張する「合理的受容可能性」(224頁)という基準も、説得力を持ちえていない。むしろそれは、「一体何が合理的受容可能性を正当化するのか」という新たな問題を提起するであろう。

つまるところ、「過去の出来事」を「過去の出来事」たらしめる「物語り」的な「手続き」および「論理整合性」自身に対する考察を、「歴史の物語り論」が反省的に提示できていないのが現状であると思われる。例えば、『歴史を哲学する』においては、『物語の哲学』で使われていた「物語」概念の用法への批判を回避するためか、様々な用法において「物語り」の概念が用いられているが、その内実は「理論」¹⁴であり、「解釈」¹⁵であり、「フィクション」¹⁶である。しか

し、こうした「物語り」概念の使用は、むしろ「物語り」概念の内容を空疎にしてしまう恐れがあるのではないか。「物語り」という言葉を用いることによって「解釈」や「フィクション」の意味を表すのであれば、もはや敢えて「物語り」という概念を使う利得は一体どこにあるのだろうか。こうした観点から、『物語の哲学』から『歴史を哲学する』への移行は、確かに「反実在論」から「反『実在論』」への立場の明確化という意義¹⁷があったとは言え、むしろそれは「歴史の物語論」としての立場を曖昧なものにしてしまったとさえ言えるのである。

それでは、「歴史の物語論」に関する議論はその現代性を失ってしまったのであろうか。そうではないと筆者は考えている。なぜなら、20世紀に起こった未曾有の戦争体験をいかに「記憶」し、それらをいかにして次の世代へと「物語る」のかという問題は、むしろ21世紀において喫緊の課題となっているからである。だからこそ、90年代から2000年代にかけて行われた「歴史の物語論」をめぐる論争は、繰り返し検討されるべき価値を有しているのである。

しかし、それでは、私たちは一体どこから議論を再開すれば良いのだろうか。「歴史の物語論」を考え直すためには、一体いかなるアプローチから「物語」の問題を考えていけば良いのだろうか。

ここで私が提案する出発点とは、野家が繰り返し『物語の哲学』の中で用いていた「解釈学」という着想である。野家は「解釈学的変形」や「解釈学的創造」等、随所でそのフレーズを使用していた。また、「物語る」という言語行為について考察する際にも、ディルタイの「追理解」、ガダマーの「作用影響史的意識」、そしてリクールの『時間と物語』についての言及を断片的に行っていた。筆者としては、野家が体系的な理論の中心軸としては採用しなかった解釈学の伝統の中から、「歴史の物語論」を論じ直すための視座を模索したいと考えている。そしてその中でも、筆者がとりわけ関心を抱いているのはリクールの解釈学である。なぜなら、リクールはまさに『時間と物語』の中で「歴史物語 (récit historique)」と「フィクション物語 (récit de fiction)」の関係性を解釈学的に考察しているからである。そのため、次節においては、リクールの『時間と物語』の議論を本稿に関係する限りで簡潔に検討しつつ、『物語の哲学』の立場との相違点を際立たせることで、解釈学的な視座から新たに「歴史の物語論」を考察する道筋を素描したい。

(四)

まずは、『時間と物語』におけるリクールがいかなる言語学的立場に立ってい

たのかという点を確認するところから始めよう。先程、野家がソシュールの言語学（すなわち「ラングの言語学」）の立場に依拠しつつ、それを「脱構築」のエスプリでもって変奏することを通して自らの「物語論」の血肉としていった点は確認した。それでは、リクールはソシュールに対してどのような立ち位置を取っていたのだろうか。

60年代から70年代にかけてのリクール解釈学の成立過程を確認する上で、私たちがまず見通さなければならない事態とは、次である。すなわち、リクール解釈学を貫く基本的なモチーフとして、「構造主義」との対決（およびそれとの対話）がリクールの思索を導いているということである。リクールにとって、ソシュールに端を発する構造言語学（およびそこから派生する構造主義的思考）とは、常に乗り越えねばならない強力な論敵であったのである。1967年5月号に発表された論文「構造、言葉、出来事」において、リクールは次のように語るところからその論述を開始している。

この論文の意図は、構造主義に関する議論をその由来の地、すなわち言語の科学、言語学へと連れ戻すことである。その地において、その論争に光を当てると同時に、その論争の熱を冷ます機会がある。なぜなら、そこにおいてこそ、構造主義的分析の有効性とその有効性の限界が見出されるからである。¹⁸

この一節から明らかなように、リクールは構造主義的分析に一定の有効性を認めると共に、その分析にはある種の限界があることを指摘している。周知の通り、構造主義の登場による知の地殻変動は目覚ましいものがあった。しかし、構造主義的方法論が成功を取めたからこそ、リクールは「この成功そのものが、ディスクールを構成している様々な行為、すなわち操作や言語過程の理解を、構造的知性の外に取り残すという代償を有している」¹⁹と主張するのである。

それでは、構造言語学に欠けている言語理解とはいかなるものであろうか。同論文において、リクールは構造言語学によって後景に退いてしまった言語の在り様として、次の様態を叙述した。

しかし、とりわけ私は、言葉についての省察を、それも、そこにおいて構造と出来事が不断に交換されるような言語活動の場としての、言葉についての省察を、素描したいと思う。²⁰

「構造」と「出来事」の「交換」が行われるところに、言語活動の現場の特質があるとリクールは見る。このとき、リクールが「構造」という語に対して併置している「出来事」という概念の内実を押さえることが肝要となる。しかし、「出来事」とは一体何であろうか。

ここで私たちが眼差しを向けなければならないのは、ソシュールに淵源を持つ「ラングの言語学」²¹ではなく、フランスの言語学者É.バンヴェニストによって唱導された「ディスクールの言語学」である。バンヴェニストは構造言語学に馴染み深い「ラング」／「パロール」という区別を採ることはせず、「パロール」の代わりに「ディスクール」の概念を導入した。それというのも、前者にはやはり、ラングの残滓としての、そして結局はラングの自足的構造に還元されてしまうところの「パロール」というニュアンスが付きまってしまうからである。そうした構造主義的前提においては、やはり語る主体によって発話されるどころの「文章」が有する意味論的力動性についての考察の道筋が閉ざされてしまう。このようなバンヴェニストの危惧にこそ、リクールは哲学者として大きな共感を抱いた²²。こうした問題関心は、ソシュール言語学の基礎的な枠組みに則り、その見地からデリダやバルトの「テキスト論」に自らの「物語論」の立場を置いた野家の戦略とは大きく異なるものである。

さて、本来であれば、ここから「ソシュールのラングとパロールの二分法よりもずっと発展性のあるもの」²³としてリクールが評価するところのバンヴェニストの「記号論」および「意味論」の区別について検討し、さらにそこから、ディスクールの場において新たな意味を創造するリクールの隠喩論の内実を説明しないといけないのであるが、紙幅の関係上、本稿においては、さしあたりリクールがソシュール由来の構造言語学を「ディスクールの言語学」の観点から克服を図ったという点を確認することで、目下の目的を達したこととしたい。むしろ、本稿において重要なことは、次の事態を洞察することである。「歴史の物語論」においてリクール解釈学の立場を導入するということは、すなわち、ソシュールに端を発する構造言語学の立場を乗り越え、「ディスクール」という言語現象を基軸にして、人間と言語、そして言語と世界の関係性を考え直すことを意味しているのである。

リクール解釈学の集大成であり、哲学的物語論の結実でもある『時間と物語』という浩瀚な著作をいかに取り扱うかというだけでも大きな問題である。しかし本稿においては、先ほど述べたように、リクールが「歴史物語」と「フィクション物語」に対してどのような立場を取っているのかという点を簡潔に確認するに

とどめ、筆を擱くことにしたい。

『時間と物語』第一部第三章「時間と物語——三重のミメシス」において、リクールは「先形象化」、「統合形象化」、そして「再形象化」とから成る「三重のミメシス」について論じている。ここでリクールが、「物語の二大様態」として「歴史物語」と「フィクション物語」を峻別しているという点を確認することが重要である。実際、リクールは次のように述べている。

虚構のないし「想像的」と、「現実的」との区別に加えられる修正の幅がどのようなものであれ、フィクション物語と歴史物語の差異は依然として残るのであり、それを再定式化することが本研究第四部の課題である。²⁴

それでは、リクールはいかにして「フィクション物語」と「歴史物語」を区別するのであろうか。それは、両者の間に存在する「指示作用」の差異性からである。フィクションないし「詩的ディスクール」によって創造される「第二次の指示作用」という着想は、すでに『生きた隠喩』において綿密に検討されてきた課題であるが、ここでリクールは、隠喩論の議論を用いつつ、「歴史物語」における「過去」の「指示作用」という問題に取り組む道を選択するのである²⁵。

もちろん、リクールは存在論的な出来事としての「過去」と、それらをディスクールによって指示する「歴史（記述）」との間に安易な対応関係があるという議論をしているわけではない。むしろそこでは、「(かつて) あった」と「(もはや) ない」との間における緊張関係を「ように」という比喩論的アプローチから考察する試みが展開されているのだ。「歴史的過去の实在」に対する比喩論的アプローチという企図は、リクールによって切り開かれたものの、まだ体系的な考察がなされていないのが現状である。そのため、比喩論的アプローチの内実を検討していくことが、同時に「歴史の物語論」を考察する為の解釈学的視座を模索することにも繋がることであろう。

本稿は、「歴史の物語論」を考え直すという企図のもと、野家啓一氏の『物語の哲学』を再検討し、そこから哲学的解釈学の道筋を模索することを目的とするものであった。その為、本稿は準備的な性格を持つものであり、「歴史の物語論」再考に向けたささやかな一歩として記述されたものである。21世紀に山積された〈歴史をめぐる問題〉に対して、哲学的解釈学はいかなる応答を示せるのか。そして、リクールによる「比喩論的アプローチ」はどこまでその有効性を持つのか

か。これらの問題に答えることを通して、「歴史」と「物語」の問題、そして「記憶」と「歴史」の問題を熟慮していくことが、いま、求められていると言えるだろう。

注

- 1 野家啓一『物語の哲学——柳田國男と歴史の発見』岩波書店、1996年。本稿においては2005年に増補・改題された文庫版を用いた。
- 2 ここで「物語」と「物語り」という表記が分かれているのは、いわゆる「ストーリー」として理解される前者に対して、後者に「動詞的」ないし「機能的」な側面を持たせるという差別化が行われているからである（この点に関しては第7章「物語り行為による世界制作」および文庫版における「増補新版へのあとがき」を参照）。さらに、鹿島徹『可能性としての歴史』（岩波書店、2006年）、9頁以降も参照されたい。なお、この点を踏まえて、鹿島は「歴史の物語り理論（narrative theory of history）」（3頁）という表現を用いている。
- 3 同じ趣旨の事柄を、野家は次のようにも表現している。「繰り返せば、経験を語ることは過去の体験を正確に再生あるいは再現することではない。（中略）物語行為は、孤立した体験に脈絡と屈折を与えることによって、それを新たに意味づける反省的な言語行為といえるであろう。言い換えれば、『体験』は物語られることによって『経験』へと成熟を遂げるのである」（115頁）。
- 4 「過去の出来事は『描写』されるのではなく、こう言ってよければ想起的に『構成』されるのである」（114頁）。
- 5 野家は大森荘蔵の「想起過去説」の議論を用いながら、「大森テーゼ」を次のようにまとめる。「つまり、経験を語ることは過去の体験を再生ないし再現することではなく、過去の体験は経験を語る物語行為から独立には存在し得ない、ということである」（117頁）。このとき、存在論的な意味における「過去」ではなく、「過去の体験」という表現を用いていることに注意されたい。
- 6 なお、柳田國男の民俗学に対してこのような評価をくだすことに関しては、すでに高橋哲哉が批判を試みている。詳しくは高橋哲哉『歴史／修正主義』（岩波書店、2001年）、54-61頁を参照。
- 7 Derrida, J., “Signature, événement, contexte”, *Marges de la philosophie*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1972.
- 8 *Ibid.*, p. 392.
- 9 *Ibid.*, p. 392.
- 10 野家は「ロラン・バルトの言葉を借りれば、『作者というのは、おそらくわれわれの社会によって生み出された近代の登場人物』なのである」とした上で、「してみれば、『物語』と『作者』とは、背馳するとは言わないまでも、基本的には相容れない概念だと言えよう」と述べている（56頁）。
- 11 この点については、特に73-74頁を参照。
- 12 Danto, A., *Narration and Knowledge*, Columbia U. P., 1985, p. 152.

- 13 有名な例で言えば、後年の野家自身もダントーの例として挙げている「アリストタルコス は紀元前 270 年に、コペルニクスが 1543 年に発表した理論を先取りしていた」という物語文である。この歴史的命題は、アリストタルコスが彼自身の理論を考案した当時に言明することができない。なぜなら、この物語文はコペルニクスの地動説が評価され、その出来事とアリストタルコスの地動説が結びつけられたとき、はじめて言明されることのできるからである。詳しくは、野家啓一『歴史を哲学する』（岩波書店、2016 年）、88-89 頁を参照。
- 14 「この『理論』を『物語り』と呼び換えるならば、われわれは歴史的出来事存在論へと一歩足を踏み入れることになります」（118 頁）。
- 15 「しかし、それら [考古学的な遺跡や発掘物のような物理的物体] が発掘された地層や残留炭素による年代測定、さらには土器の文様の比較などの『解釈』を通じてはじめて、歴史的意味をもった物体として同定されることは言うまでもありません」（205 頁）。
- 16 「むしろ、歴史的事実は歴法的時間と地理学的空間というフィクショナルな概念枠組み、すなわち『物語り』の枠組みを通してはじめて、実在的な物理的空間と結びつくことができ『実在』の意味を獲得することができるのです」（223 頁）。
- 17 この変更点は、「歴史の反実在論」が戦争犯罪に対する「否定論」に利用されないようにするという意味で重要なものであった。したがって、〈物語一元論〉の感が強かった『物語の哲学』に対して、『歴史を哲学する』においては〈存在と認識の二元論〉という立場が打ち出されている（46-49 頁を参照）。
- 18 Ricœur, Paul, *Le conflit des interprétations, essais d'herméneutique*, Seuil, 1969, p. 121.
- 19 *Ibid.*, p. 121.
- 20 *Ibid.*, p. 122.
- 21 例えば、リクールは 1973 年の秋にテキサス・キリスト教大学で行われた講義において、ソシュール由来の構造言語学の特徴を以下のように整理していた。それぞれ、(1) 通時的アプローチに対する共時的アプローチの優位。(2) 共時的アプローチの対象としての音韻体系。(3) 記号体系に含まれるいかなる要素も、それ自体において何らかの意味を持つことはないという点。(4) 記号体系は閉鎖されており、いかなる言語外の現実とも関係を持つことはないという点である。詳しくは Ricœur, Paul, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, Texas Christian University Press, 1976, p. 5ff. を参照されたい。
- 22 リクールは 1966 年にジュネーブで開かれたフランス語圏哲学会に参加しており、その際、「言語の形式と意味」と題されたバンヴェニストによる開会講演において、積極的に質問を行っている。
- 23 Benveniste, Émile, *Problèmes de linguistique générale, II*, Paris, Gallimard, 1974, p. 236.
- 24 Ricœur, Paul, *Temps et Récit, t.1 : L'intrigue et le récit historique*, Paris, Seuil [Point Essais], 1983, p. 126.
- 25 『時間と物語』第四部第二篇第三章「歴史的過去の実在」を参照。